

第 21 回環境教育・環境学習ネットワーク会議 会議要旨

日 時：平成28年9月16日（金） 15:00～17:00

場 所：横須賀市役所 3階会議室B

出席委員：高橋弘二座長、内船構成員、桐谷構成員、高橋直人構成員、
高橋正明構成員、奈良谷構成員、野崎構成員、吉田松子構成員、
米田構成員（計9名）

事務局：環境政策部環境企画課（小澤課長、笠原主査、大場、山中）

傍聴：なし

◆ 会議の流れ

1 開会

2 報告

（1）平成28年度教員向け環境学習講座の実施結果について

（2）平成28年度活動者向け人材育成講座の実施について

3 議題

（1）今後の人材育成講座について

（2）横須賀ECO大賞の見直しについて

4 その他

（1）事務連絡

◆ 報告 1 平成28年度教員向け環境学習講座の実施結果について

[要旨]

平成28年8月10日（水）に天神島臨海自然教育園で「天神島大冒険！—50周年の天神島で学ぶ—」をテーマに、教員向け環境学習講座を実施した。17名の教員の参加（申込18名）があり、ネットワーク会議からは1名が参加した。講義およびフィールドワークを行ったが、ともに好評であった。今後も他部門の協力のもと、連携研修として実施していく。

高橋座長

ただ今の報告に対して質問事項がありましたらお願いします。

高橋正明構成員

フィールドワークの時間が1時間10分だったようだが、「時間が十分だった」「足りない」

など気付いたことはありますか。また、講座でのしおりづくりは希望者がいればということだったが、希望者はいたのか。

笠原主査（事務局）

時間は、当初の予定より長くかかってしまった。当初は片道を見学し、同じ道に戻ってくる時に学芸員からもう少し詳しく説明してもらおう予定だったが、片道で時間になってしまった。もう少し時間が長くて良かった。講座のしおりづくりは多くの先生に参加していただいた。学芸員の方が用意してくれたビニールパウチと台紙で、落ち葉などを挟み込み、本のしおりに使えるものができ、今回の研修の記念にもなった。正確な人数は把握していないが、8割から9割の先生が体験した。

高橋正明構成員

もう少し時間的な余裕を考えることが、次回以降の課題になるか。午前中だと昼までとの制限はあるかもしれない。今の報告を聞くと、先生方は知りたいことがたくさんあるということなので、そこを汲み取る方法を今後考えてもいいと感じた。

高橋座長

その他ございますか。このネットワーク会議から参加されました野崎さん、感想をお願いいたします。

野崎構成員

私が参加した理由は二つあります。一つは私の住まいの地域の中にある施設ということと、もう一つは、交通の便が悪いからか、利用者があまり多くないという話を聞いており、地域にある大切な資源なので、それが気になり参加した。また、土地の者としてもっと頻繁に天神島行く良い機会と思い参加した。

天神島で地層の話が聞けることが初めてで、参加し大変面白かった。詳しい説明を聞いて「なるほど」と得ることが多かった。断層のことなど面白い話が聞け、参加して良かった。先生方もとても熱心に楽しんで参加していた。

1点だけ講座の内容ではないが気になることがあった。南門を入れてすぐのところにオオブタクサ何本か相当大きく育っていた。海の小さな植物の中にオオブタクサがあると大きくて大変目立つ。先生方から「これは何の草ですか。」と質問が出ていた。それについては「定期的に草刈りをする。」との返事があったが、目立つ草なので、手で抜くなどの処置をして早めに排除すべきものではないかと思った。

何年前かに天神島に行ったときに南門に入る手前の草地で学芸員の方か、天神島の管理の方が小さな草を手で丁寧に抜いていた。何を抜いているのか聞いたところ、チチコグサだった。それは教育園の外にも関わらず丁寧に抜いているのを見て、自然の保護とはこう

いうことかと感心した。

高橋座長

ありがとうございました。その他ございますか。

奈良谷構成員

事務局にお願いしたい点がある。8月10日に開催されているが教育研究所で他の研修があったのか、また、これを選択しやすい状況だったのか知りたい。幾つかある中で17名の方が申し込んだのか、この日はこの講座しかなかったのか、次回までに参考に知りたい。

高橋座長

できましたらお願いします。

では、報告2をお願いいたします。

◆報告2 平成28年度活動者向け人材育成講座の実施について

〔要旨〕

「深めよう環境教育」をテーマに、環境活動者向けに全2回の人材育成講座を実施する予定。第1回目は、平成28年10月7日（金）に天神島臨海自然教育園で「ワークショップ：天神島で考える～伝えたいこと、伝えかた～」をテーマとして、初めてワークショップ形式で開催する予定。講師は、内船構成員に依頼。第2回目は、平成28年10月17日（月）に電力中央研究所横須賀地区で「電力中央研究所 横須賀地区の研究所を知ろう！」をテーマとして、環境活施設見学を開催する予定。

高橋座長

ありがとうございました。第1回は天神島臨海自然教育園、第2回は電力中央研究所横須賀地区の見学会ですが、ただ今の説明に対し、質問がありましたらお願いいたします。内船構成員、何かありますか。

内船構成員

8月の教員向けの研修に引き続き、天神島というフィールドを提案なので、今回は指導者向けということであるならば、多様な環境活動に際して主体的に考えて行動できる人材が必要になると思った。学芸員の説明を聞いたりするばかりではなく、参加者それぞれがコミュニケーションをとりながらアウトプットをしていくようなワークショップを天神島で行ってみたいと思っている。

高橋座長

皆さん、ご都合がございましたらぜひ参加してください。

野崎構成員

先程の天神島の講座とつながるのですが、三方を海に囲まれている横須賀にとって天神島自然教育園の価値は大変なものだと改めて感じた。馬堀の自然教育園とは別に海のための古くからの自然を丁寧に残している場所としてもっともっと活用して重要な施設として考えていかなければならないと感じたので、今回の講座にもまた参加したいと思っている。

高橋座長

あの付近にレストランが増えました。結構遠くから車で来ているようですが、どれだけ天神島に立ち寄るかですね。

野崎構成員

50周年を自然・人文博物館で打ち出しているが、50年前と現在の自然の変容というか、何らかの違いがあると思うし、現在は現在で海の問題がいろいろあると思う。それに関連した調査や展示があると面白いと思う。ニュースで聞いたが、尾瀬が65周年で65年前の調査と新しく始める調査でどのように違っているのかを見るようなのですが、天神島も50周年ということなので知りたいと思う。

内船構成員

8月7日に特別展示に関連した講演会を開催した。林元館長に50年前の背景を話してもらった。当初は公園としてごみ箱が置いてあり、バーベキューなども行っていた公園だったところから始まり、そこから自然を保護しながら見せていくスタイルにしていくのにどれだけ苦労したかという話だった。これからどうしていくのかをいろいろな方々と考えていかなければならないと思った。

高橋座長

横須賀市にとって貴重な財産ですね。

高橋正明構成員

天神島の講座は、送迎バスはないのか。

笠原主査（事務局）

ありません。

高橋正明構成員

交通が不便と書いてあったので、送迎バスがあるとより多くの方が参加できるかと思う。

高橋座長

逗子から直行のバスがある。

野崎構成員

本数が非常に少ない。

奈良谷構成員

50周年とは資料で見えていましたが、50年はすごいと思う。子どもの頃はよく遊んでいた。バーベキューも行ってた覚えがある。フィールドワークはなかなか海側から見る機会がないと思う。機会があれば海の中も見てほしい。今、磯焼けしていて佐島の漁師さんが潜っても採るものがないというのもあるので、観光協会などが三崎からグラスボートなどを借りてきて走らせるようなことがあるとよい。地元の大楠などでも取り組むべきであろうが、機会があれば町内会長などに話をしたいと思う。

高橋座長

それでは議題に入ります。事務局、説明をお願いします。

◆議題1 今後の人材育成講座について

〔要旨〕

平成29年度以降の相互交流を生かした人材育成講座の企画に向けて、内容や構成などを自由に議論する。本日の意見をもとに、具体的な企画案を作成する。

論点としては、講座の内容や、現在の講座の構成、講座に協力できることなど。

高橋座長

ただ今、説明のありました事項に関して、質問や確認事項がありましたらお願いします。

これまでやってきていることを基本とした改善点、あるいはそれに追加していくことが求められていると思います。皆さまのご意見をいただきたいと思います。

野崎構成員

資料を見ると参加人数が初めのうちは多く、平成25年度は6名、9名と少ないが、その理由や原因がどこにあると考えているか。市の職員が参加の時は多いがどうしたらいいの

か。

奈良谷構成員

表現の仕方として参加人数は記載されているが、定員に対して何%くらいの参加なのかが知りたい。確かに全体的に少なくなっている感じはする。

野崎構成員

テーマが先生方や活動者にとって、興味をもてない、あまり関係がない、特別必要としていないものだったのか。そのことが分かるとこれからのことが考えられる。

高橋正明構成員

先生方に対して教育委員会と連携して行うように2、3年前からなったが、それは何年からか。

笠原主査（事務局）

平成26年度からで、今年で3年目になる。平成26年度から教育委員会で学校の先生の研修の枠として定員は20名程度で入れてもらい、実際に参加人数も増えている。早い段階で定員オーバーになるが、当日急な予定でキャンセルがありこの人数になっている。

高橋正明構成員

教育委員会との連携というところで効果が出てきている。回数を増やすと人数が増えるのかどうか。夏休みを利用すると1回程度だと思うが。

小澤課長（事務局）

夏休み以外の時期に先生方に来てもらうのは難しいので、1回が限界かと思う。平成26年度の神奈川大学の松本先生に講師をお願いした講座は、いろいろな方が参加してくれ、人数も増えた。フィールドによっては制約が出てきてしまう。

高橋座長

8月の天神島臨海自然教育園の講座のアンケートに「定員を増やすか、回数を増やしてもらいたい。」との意見があったが、それについてはいかがですか。

笠原主査（事務局）

教育委員会と連携する前と後での増減比は出しているが、講座全体のうち占める位置が高いのか、その辺りも見ないといけない。他の講座で定員が多いならそれに合わせることもできるかと思う。そこはまだ調整していないので相談していきたい。より多くの方に参加

加していただくのが一番良いかと思っている。回数を増やすかどうかは、全体の研修のスケジュール案があると思うので確認する。

桐谷構成員

8月の終わりに弊社（日産自動車株式会社）追浜工場で親子向けの環境教育を企画し、広報よこすかにも掲載された。親子連れで盛況のうち二日間が終了した。東京の葛飾区から、インターネットを見て小学校の先生3名が参加してくれた。何の目的で来たかと言うと、社会の教科書を見ると当たり障りのないことしか書いてない。もっと現場の本当の声を聞いて、それを子どもたちに伝えたいということで熱心な若い先生方で、それとあわせて環境学習もあったので申し込みましたということだった。非常に満足して帰られた。我々ももちろん嬉しかった。もう一方で、横須賀、横浜からは参加がなかった。もしかしたらニーズはものすごくあるが、そこを上手く伝えきれていないと感じた。もし、横須賀の先生方が「機会があれば聞いてみたい」、「話をしてみたい」というのがあれば企業側もそのような場を作るのも大事かと思う。このような講座でやってもいいし、皆さんの意見をいただきながら、もう少し実際に交流する場にしてみてもいいのかと感じた。

高橋座長

ありがとうございました。その他、何かございますか。

内船構成員

平成24年度に行った講座「学校カリキュラムと環境学習の現状」で、指導主事の先生が学校での状況、求めている環境プログラムや指導者など、学校側のニーズを話していただく講座に出たことがあるが、博物館でもなかなか聞けない話だったので、このような話はこれからも何年かおきに行くと指導者にとってもいい機会になると思った。

高橋座長

今日は学校の先生方が欠席なので、高橋直人構成員いかがですか。

高橋直人構成員

学校教育と社会教育とでは異なるので学校の意見は出せないが、先生方の現場の声が聴こえないとニーズは集まらないと思う。現場の先生の声がどういうものなのかを指導主事の先生がいろいろな学校に行かれて把握されていると思うので、その声を集めて環境企画課とやりとりする必要があると思う。講座に参加している十何人かの先生の声はあると思うのでそれも参考にしてほしい。いかに先生の本当のニーズをつかむかが大切だと思う。

高橋正明構成員

今日は学校の先生は欠席だが、先程のアンケートから見る限りでは、自然についてのフィールドワークや知識、情報、現物などにニーズが強そうな気がする。テーマを何にするかということに関して、自然教育や自然環境、天神島臨海自然教育園や馬堀自然教育園がある。最近猿島もブームになっているので、その自然を説明できる学芸員や専門のインストラクターの方に説明していただき現地で学べるようなテーマを上げて良いと思う。

高橋直人構成員

社会教育の分野でもそうだが、屋外に出て、いろいろな所を見学したり、調査研究したりするのは、どのような講座であっても参加する方々は興味を持っている。そのような部分があると参加しやすいと思う。

米田構成員

資料によると2回目、3回目の参加の方がいる。その方は1回目に出てすごく魅力を感じ、また参加していると思う。その方の意見を聞けばもっとアピールできるのではないかなと思う。

高橋直人構成員

学習情報について、先生方と話をしたとき、情報の伝達で、一番、強みになるのはロコミだった。先生同士での情報交換が大きいと感じた。ホームページに出すとかチラシを配るのはもちろん大切だが、この講座が良かったと感じたら、そのことを先生から他の先生に伝えていただくことを講座の時にお願いとよいと思う。

高橋座長

その他いかがですか。

内船構成員

8月の講座は博物館が担当したが、教育研究所の教員向けの夏休みの研修プログラムには博物館に自然の学芸員4人がそれぞれ一つずつ研修プログラムを担当している。その中には海洋生物の萩原学芸員が毎年磯の観察を走水と天神島臨海自然教育園で、隔年で開催している。今年は走水での開催だったので、天神島での講座は磯以外の要素で柴田学芸員と山本学芸員に地層と植物について講座を行った。フィールドに出て博物館の学芸員が解説をする研修会は毎年教育研究所でプログラムをもっている。博物館として関わる時は環境的な要素を絡みつつ内容を工夫して関われば良いかなと思う。

高橋座長

吉田構成員、自然環境共生課では市内の自然環境活動団体交流会を行っていますが、交流や接点は考えられますか。

吉田松子構成員

テーマによっては聞きたい話があればお願いすることはできると思う。後は里山のフィールドもある。ただし、先程も天神島臨海自然教育園は行くのに不便と話が出たが、見て楽しい場所は遠方だったり、便が悪かったりするので、気楽に行くのは難しく足が遠のくかと思う。

高橋座長

自然環境共生課がまとめて、それぞれの団体が活動するスケジュールができていますが、どれだけ活用しているか。あれだけでも市内ですごく活動をしている。

吉田松子構成員

知られていないことが多い。

高橋直人構成員

学校の先生にお知らせするときに、天神島から見た景色は視覚的に訴えるものは何かあるか。ハマユウが咲いているとか、海の様子であるとか、文字をたくさん見るより、写真を1枚見た方が宣伝効果は大きいと思う。そのようなものがあると先生方も興味を持たれるのではないかと思う。

野崎構成員

参加したとき資料に50周年で作られた「天神島冒険図鑑」は、とてもいい資料だった。地層のこと、それについての歴史、これを持って天神島の中を歩けば、学芸員の方がいなくても自分で楽しめる、いい資料だと大切にしている。エコツアーの中では猿島や観音崎はあるが天神島はリストアップされていないので、先生方がこの資料をご覧になればもっと興味が沸いて無理をしてでも行ってみようと思うかもしれない。

高橋座長

事務局からもう少し意見を聞きたいことなどありますか。

笠原主査（事務局）

今はどちらかというと、学校の先生向けの意見と活動者向けのフィールドの部分のご意見をいただいた。例年ではもう1つ、今年では電力中央研究所の見学ということで、全然

違う分野、企業という目線でこれまで見学をしている。その部分についてはいかがか。何年か空いたのでまたそこに行くのも良いし、今年は企業から研究施設というかたちで電力中央研究所を提案した。まだ研究施設があるので他の研究施設でもよいし、違う目線でもいいと思う。

高橋座長

横須賀には世界に誇るYRPもあるので、そちらを見学するのもあるかと思う。

野崎構成員

電力中央研究所は写真を撮ってはいけないとあったが、ぜひ行って研究所を見たいと思う。エネルギー関係は小学校よりも中学校、もう少し学年が上の子どもたちを教えている先生の方が、関係があり興味をもたれるのではないか。中学校にも教育委員会としては発信をしていますね。

小澤課長（事務局）

中学校からは指導者の派遣などもないです。受験時期なので環境教育は余裕がないからか、行っていない印象です。先生も環境に対して意識があまりないのかと思う。

高橋直人構成員

小学校だと総合学習の時間、理科、社会の中で環境の分野を行うと思うが、中学校になるとより専門的な教科の学習になるのでなかなか難しい気がする。それに輪をかけて受験が出てくる。

高橋座長

ここ何年も中学校から要望はない。

奈良谷構成員

電力中央研究所は10月1日が一般公開日。公開日は休日、講座は平日なので見られるものが違うかと思うが、全体を見た感じでは小学生向けではないかと思う。私も参加したいと思っている。他は千葉の2拠点しかないので地元で見せるのはとてもいいと思う。

小澤課長（事務局）

10月1日は横須賀市地球温暖化対策地域協議会もグラスペイントで出展する予定。内容的には難しいかと思うが、小学生の子どもたちがたくさん来る。今回は県立横須賀高校科学部と県立海洋科学高校が出展するのでレベルも高く小学生には難しいかと思う。

奈良谷構成員

電力中央研究所の広報の方が、やはり小学生以下が多い、それ以上は圧倒的に少ないと話していた。

桐谷構成員

今の視点は大事だと思う。我々企業も小学生向けの環境教育は行っているが、中学生に対してはアプローチしていないと感じた。何年か前に田浦中学校の先生から依頼があり中学生の見学を受けたことがあるが、それだけでした。職業体験はあるが環境については行っていない。

奈良谷構成員

職業体験は商工会議所のキャリア教育プランで行っていますが、中学校で環境を行っているのは見たことがない。昔は大楠中学校で行ったことがあります。

桐谷構成員

大人になるまでの繋がりが無い気がする。

高橋正明構成員

今回、この講座に参加された先生の中で中学校の先生はいましたか。

笠原主査（事務局）

今回はいませんでした。

高橋正明構成員

それは小学校の教員向けの研修だったのか。

笠原主査（事務局）

対象は小学校、中学校の教員向けです。申し込みの結果、小学校の先生のみでした。

奈良谷構成員

そのような話からすると、先生方は興味もあるけど、授業に繋がる場所に参加するという事なのか。

高橋直人構成員

中学生が忙しいことももちろんあると思うが、先生自身がクラブ活動の指導、その他いろいろな業務が忙しく、参加できないというのが現状としてあると思う。

高橋座長

中学生になったら全体ではなくクラブ活動などで環境に関心のあるひとたちの研修があってもいいかもしれない。

高橋直人構成員

市民大学の中でロボットに関する講座を取り上げたときに中学校のクラブ活動の先生や生徒に講座に協力していただいたことがあった。クラブ活動などと内容が合致するものがあるといいが、環境に関するクラブ活動があるのか。学校の先生方に確認すれば分かると思う。

奈良谷構成員

理科部や科学部など。

高橋座長

昨年度のE C O大賞で追浜中学校の科学部が何十年も鷹取川の水質調査をし、賞を取りました。

奈良谷構成員

10月の終わりにわんぱくフェスティバルを神奈川県立保健福祉大学で行うのですが、長沢中がきてペットボトルを使い理科的なイベントをするのですが、そういうところに何か繋がると良い。

高橋正明構成員

来年度の講座に関して1つは自然環境で、もう1つは今年行ったように先端企業や温暖化対策、そちらの方向での講座や見学会があつていいかと感じる。この2本柱にし、後は中学生をどのように取り込むかを今後の課題としたらどうかと感じた。1点紹介ですが、私は横須賀市地球温暖化対策地域協議会のメンバーで省エネ推進プロジェクトチームに属しているが、その中で節電コンクールを行っている。小学校、中学校が対象ですが浦賀中学校から昨年は500件、今年は300件応募があった。これは多分1人の先生が呼び掛けていると思う。そのような先生がいると急に増えることもあるかを感じる。そういうところに上手くアプローチする手はあるか、そのような先生を応援するような取り組みができると増えると感じた。今は1校だけなのでこれをどう広げていくかが課題。やはり環境活動は学校の先生の個人的なスキルや活動の方向性を含めて考えると、アプローチできるかと感じた。

高橋座長

それではありがとうございました。

次の議題に移ります。

◆議題2 横須賀ECO大賞の見直しについて

〔要旨〕

「横須賀ECO大賞」は、平成21年度から始まり、顕著な功績がある活動を表彰する制度であるが、現状を踏まえた見直し（案）について議論する。また、選考結果に専門的な知見を加えること、企業からの応募増に対する意見についても併せて意見を伺う。

高橋座長

横須賀ECO大賞ということで始めたが、応募件数が減ってきていることや隔年表彰になり関心度が落ちてきているということもあるので、今年度見直そうと提案がありました。今、説明のありましたことについて質問や確認事項がありましたらお願いします。その後にご意見を伺います。

高橋正明構成員

ECO大賞ということで目的や対象者は分かるのですが、どういうことをしたらECO大賞に応募できるかどうか、活動のガイドライン的なところを広めると応募しやすくなるかと感じた。それがこの説明の中で見えてこないの、その点をもう一つ工夫したらどうか。

笠原主査（事務局）

特に具体例は設けていない。環境活動全般に対してであり、環境活動は範囲が広い。清掃クリーンもあり、環境保全や温暖化対策で省エネ対策をするなど1つ1つあげていくと、これは違うのかということもあり全ては把握できない。申し込みを受け付けた上で、評価はある程度のボーダーラインを設けているが、応募のポイントとして取り組みが長期というのが1つ、ただ長期は何年というガイドラインはない。感覚的には最低2、3年くらいの活動を続けていて、今後も活動を続けていくというような、活動内容というよりも活動期間という感覚的なものはあると思う。

高橋正明構成員

そこも分かるが、ECO大賞というと漠然としていて、これは該当になるのかなど、応募する方で分からないので大枠でもいいのでガイドラインがあると応募しやすくなるので

はないか。確かにあまり絞り込み過ぎると狭くなってしまいが、大枠で自然環境の保護とか、温暖化対策であるとか。

野崎構成員

具体的なことはなかったと思うが、募集要項に書いていなかったか。

小澤課長（事務局）

E C O大賞というイメージはボリュームがあり、尻込みして出てこないことがあるので、名称を改め単純にエコ活動と言え小々なものからあるのではないかと思う。入口から抑えてしまとなかなか難しいので、まず応募してもらい、評価の段階で点数をつけて、ある程度の点数以上であれば賞がもらえるような応募しやすいイメージにしたいと思う。そのような形で進めていきたいのが大きな一番の主旨。

笠原主査（事務局）

申し込みにはどの分野なのか、ある程度自然や大気など8項目に丸を付けてもらう。団体によっては2つ付くところもある。

高橋正明構成員

活動分野の1例でその8項目のところを募集するときに要綱に書いてはどうか。

高橋座長

応募チラシの中にあるのか。

笠原主査（事務局）

応募チラシにはない。申請用紙に今の分野がチェックできるようになっている。ポスターを見ただけではどの分野なのか分かりづらい。見せ方の部分では載せられるところを幾つか出し、「など」という表現で記載し、そこを細分化し表現するのはいいと思う。

吉田松子構成員

過去にこんな活動でこの賞をもらいましたというものは出しているか。もしそれがあれば「自分たちも出してみたい」となるかもしれない。要綱に一覧も入れるといいのではないか。

笠原主査（事務局）

応募チラシはA3になっており、半分がチラシ、もう半分が申請書になっている。半分でPRを行う構成になっている。今の段階ではご提案の部分を物理的に載せられないので、

検討しなければいけない。一方で学校向けは限定された場所になるので、もう少し詳しく過去の実績などを載せて募集する。例えばクラブ活動という目線で平成 27 年度追浜中学校が出てきているので、具体例などを載せればと思う。ホームページには過去に受賞した団体の活動内容が見られるのですが、そこでひと手間掛かる。そこはまた考えなければならぬ。

高橋座長

今日皆さんにご意見を求められている 1 つは名称です。「E C O 大賞」では硬過ぎるということですがいかがか。

米田構成員

E C O と付くと第一印象として省エネルギーととってしまう。イメージとして環境はその次にきてしまう。E C O に拘る必要はないのではないかと思う。環境活動に対する表彰制度だと思うので、難しい表現かと思うが、E C O と付くとどうしてもそちらに捉えがちなので、それにより窓口が狭くなってしまうと思う。

高橋座長

従来言葉より柔らかい感じで親しみやすいとのことで、事務局で案を考えましたが、これに対するご意見をお願いします。

米田構成員

良いと思う。

内船構成員

「E C O」という言葉に対するイメージは確かにご指摘の部分は分かる。「E C O」という言葉のイメージを、環境企画課でゴミ問題や環境問題だけでなく自然も含めた活動が「E C O」という P R し周知を図りイメージを広げていくことは重要な活動だと思う。

桐谷構成員

今、座長から名称についてということだが、もう少し立ち戻り、見直しの視点にもあるがナンバーワンを決めるのではなく、オンリーワンになるような主旨にしていきたいとある。裾野を広げるという意味では確かにそのような取り組み方があるかと思う。ただ、気になるのが何をもって表彰されているのがますます分かりづらくなるのではないかとの印象を持った。どのような基準で選考されているのか、どのようなところが評価されたのか分かりづらくなならないか。すでに議論されているのであれば説明してほしい。

笠原主査（事務局）

応募した団体には、前々回から評価結果を伝えている。ただ単に受賞しましたではなく、どういった活動が優れている、逆に受賞されなかった団体にも、「活動のここは良いがもう少しこの視点を交えていただけると」のような次のステップに向けた評価を伝えている。本日議論してほしいことにもある、「専門的な知見」ということでアドバイザーの意見も踏まえながらマイナスを伝えるのではなく、評価結果と合わせて伸びて欲しいことを伝えている。どういった取り組みが良かったのか、なぜ選ばれなかったのか、応募団体には伝えている。当初はなかったのだが、もらって嬉しいが何が良かったのか、どこが評価されたのか、また、受賞できなかったところからも評価が欲しいとの意見もあり、選考結果に添えることにしている。

桐谷構成員

皆さんがより良い活動を前向きに取り組んでいくために、「こういった考え方が大事」、「そのような取り組みをうちでも行ってみようか」と参加してもらうことが大事だと思う。表彰された方に伝えるのも必要だが、全体に対して「このようところが非常に素晴らしかった」というところがどのくらい知れ渡っているのか、それをもっと行っていくと「では、ここをもっと行っていこう」というような取り組みに繋がるのではないかと思うがどうか。

笠原主査（事務局）

広報でどれだけ結果を伝えていくか、一般的な市の方法としては「広報よこすか」に、こういった取り組みを行っている団体がこのような賞を取りましたとお知らせをしている。紙面の都合で細かく載せることはできないが、活動団体を周知する方法として「広報よこすか」やホームページに載せている。また、「よこすかECO通信」という形でそれよりも細かい表現ができるものの、読み手が「広報よこすか」よりも激減してしまうという悩みどころもある。もう一つ「よこすか環境フォーラム」で表彰を行っており、ECO大賞を受賞された団体に活動自体を紹介してもらっている。参加した方にはどのような活動なのか、生の声で知っていただく。また会場にパネルを用意し活動内容の掲示も行っている。それで十分かと言うとまだまだ足りないとは思っている。受賞団体にとっても、自分たちの活動を周知できることで、活動の参加者が増えるなどメリットがあると思うので、市も賞を渡すだけでなく手助けできればと思っている。

高橋正明構成員

今の話に関連しますが、ECO大賞でもECO活動でもいいが、まず大枠として何を求めるのかを明確にして、その結果として選考基準を決める、それによってどういう賞を贈呈するかが出てくる。また長期、短期、繰り返しが出てくるのかと思う。団体の活動その

ものを応援するのか、その団体の活動を応援することによって横須賀の自然環境が良くなるのか、温暖化対策に貢献するとか、ごみを減らすとか何を求めるか、それによってどう応援するかというところをもう少し明確にするとわかりやすいと思う。この資料を見ると表彰することは分かるが、その表彰した結果として何を得られるかというところが少し見えてこない。

笠原主査（事務局）

ねらいとしては活動団体からすると、とても魅力的な賞まではいかないが、自分たちの活動が他者からみてどのような評価をされるのかというものさしにはなると思う。市が求める環境の分野は1日、2日でできるものではなく、長年に渡りというところで活動の節目にエントリーしてもらい、市がその取り組みを評価することにより1つの励みとなり、引き続き取り組んでほしいという思いがある。目的にもあるが、将来に渡って普遍的にというために今後も引き続き活動を続けてほしいという表彰となっている。

高橋正明構成員

その活動を続けていった時、市としてその活動を継続することによって何を成果として求めるかというところをもっと分かると良い。例えば、自然環境がより広がること、地球温暖化対策に貢献するとか、電力の使用量が減るとか、最終のターゲットを盛り上げるための活動を応援する視点が1つあるとより分かりやすいと思う。それによりどういう活動分野があげられるか、選考基準をどうするかが見えてくるかと思う。そうしないと、応募の作品に対して「これはいいね」、「悪いね」ということになり、その都度選考基準が出来る感じがする。

内船構成員

今回、新名称案に「いいね」が付くあたりが、SNSを意識している感じがする。これまでの応募ではないすくい上げの方法があったりしないかと思う。これを市で公式にやっているSNSで環境活動が日常的にタイムラインに現れてくるような放り出し方をして、学校や企業の方が「自主的にこんなことをやっているよ」という投稿があれば、これに参加する保護者の方やその時に参加した方が「今日はこんな活動に参加しました」とタイムラインに出てきたら「いいね」をしてあげる、そのような仕方があってもいいのではないかと思った。それはこれまでの様式を出さないと評価がしてもらえないというものとは違い、市として引っ張り上げてきたものに評価を加えることで、「こういうことを市としては応援しています」というのが出せないかと思った。博物館でSNSを行っていないのであまり言えないが、そのような展開の仕方では新しさが出ないかと思う。

桐谷構成員

すごく面白い。ある人が見たらすごく面白い活動だと見付かるかもしれない。そのようなところで「いいね」が集まったら、もっと広げていけたり、深堀したりし、すごく良い環境活動に繋がるかもしれない。今のアプローチはすごく面白く考えてみたいと思った。

高橋座長

今回事務局から検討を投げかけられているのは名称もそうだが、今言われたようなこれまではずっと活動してきた活動に対しての評価が中心だったが、何か面白いことがあったら短期的なことも評価の対象にしようというのが入ってきたことと、1回表彰されたところが、以降表彰の対象にならないところが継続的にやっていることに対する評価をしようという点が今回の見直しの大きなところだと思います。これまでになかったことを見直すのは大変良いかと思います。野崎さんいかがですか。

野崎構成員

名前の付け方が「ECO大賞」という看板の名前は柔らかくなるが、長期活動部門賞、学校短期活動部門賞の言い方が、私たちはどのような意図で変えたと説明を聞いたので分かりますが、この部門の分け方でこの名称で果たしていいのかと疑問に思った。

高橋座長

頭だけやわらかくなっていて中は硬いということ。

野崎構成員

実施時期に功労部門は継続活動期間を4年とするとありますが、活動期間だけで線引きをされている感じがするので、そうではない表現にした方がいいと思う。

高橋座長

功労ともう一つ功績がある。何か面白いこと、すごいことをやったというような。

野崎構成員

以前、奨励賞がありましたね。

高橋座長

今回、対象を広げて色々なことを行ったけれど、その分けている内容はいいが頭につけている言葉をもう少し考える必要がある。

高橋正明構成員

賞が先あってそれにあてはめようという感じがする。そうではなく、何をねらうかによって賞が決まってくるそっちのアプローチにすれば相応しい名前が出てくると思う。

野崎構成員

長期活動部門や学校短期活動部門と明記されると、応募するときにこの部門で申し込むという選択をしなければならない。そうではなく、「私たちはこんなに良いことを行っている」という思いだけで応募が出来て、それに対する答えとして「あなたのこの会はこの部分が良い」というような賞を与える理由の「いいね」の部分を授与した方が、自由に応募ができるのではないか。あるいは、周りからも「このような団体があります。このようなことを行っていました。」などの簡単な情報だけでも届けば、柔らかくなると思う。

高橋座長

これはいつ頃までにまとめる必要がありますか。

笠原主査（事務局）

平成 29 年度からは新しい要綱で行っていく予定なので、新しい制度を今年度中に作り、来年度は新しい制度で募集したいと思う。

高橋座長

E C O 大賞という言葉がなくなるのは受賞した団体にとって淋しい。

笠原主査（事務局）

先程、野崎構成員からお話があった継続期間が 4 年というのは、一度受賞した団体が対象です。何らかの賞を受賞し、それ以降も 4 年以上活動を継続していた場合に、今は何も制度がないのですが、そこに対して功労賞を考えました。こちらから、「その後活動はいかがか。」と確認を取りながら継続して活動されていれば功労賞を授与したい。また、座長から功労だけではなく功績もご提案いただきました。4 年というのはそういう意味で、最初に申し込むときに 4 年の活動が必要ということではありません。今年設立したが実績がない場合エントリーされても実績が伴わないと評価ができないので数年の実績をベースに申請してほしい。

高橋座長

4 年は短い。すぐに 4 年経ってしまう。

野崎構成員

学校の中での環境活動は短期になるのは分かりますが、市民活動で環境活動をしているところは「賞をもらえるから何かをしましょう」ではなく、できるだけ自分たちの環境を良くしたいから長いことやりたい、やろうというのは当たり前のこと。たまたま人材がいなくなり止めざるを得ない団体もあるかもしれないが、活動団体はできるだけ長く続けたいという気持ちのもとで行っている。確かに長く行っているのは立派なことですが、エントリーはしたがこれでは評価ができないという、できたばかりの会であっても、それだったらそのような理由で今回はまだ受賞ができないと市から返答していただき、私たちは良い会を作ってこんなことをやりたいと思っているところはエントリーするのはいいのではないか。それが市民活動の意欲であり思いではないかと思う。

笠原主査（事務局）

応募要項には活動は何年との決めごとはない。実績が少ないと、思いだけは分かりますが、選考委員の方は評価が難しいと思うので、もう少し実績を伴ったときにもう一度エントリーしてくださいということもあるかもしれない。入口で受け付けないことはない。活動は4年で終わるとは思っていない。長く続けていきたいと思っている。先程、桐谷構成員からお話があったように、活動中の団体のPRになると思う。サイクルの基準を4年にするか6年にするか検討したところ、4年が良いということになった。新たに受賞される団体の紹介もあれば、既に一度受賞して継続している活動を紹介するきっかけとして功労賞がある。何か基準を設け、団体を市がPRしていくきっかけになると良いと思う。今はそのようなかたちでこの賞を活用していないので、活動団体をPRしていく目線で、賞自体は継続していくものの、それだけではなく功労賞としての魅力が確立していけば活動団体の方にも賞を取るメリットが見えてくるのではないかと思う。

高橋正明構成員

功労賞というよりは、連続受賞は難しいが3回くらいはとってもいいのではないか。1回受賞したら次の2年後には応募できないが、4年後はできる。そのときに活動しているのであれば表彰してもいいかなと。そうすると功労賞の4年後と合致するので表彰でき、3回くらい受賞したらレジェンドにする。レジェンドにすればそれは箔がつくと思います。

高橋座長

4年、5年では活動をやっているうちに入らないと思う。10年、20年続けてはじめて活動だと思う。それを4年で賞をあげるとだんだん価値がなくなってくる。あまりサイクルは短くしない方がいいと思う。5年で銅メダル、10年で銀メダル、20年で金メダルのような感じであればいいと思う。

高橋正明構成員

4年というのは1つのアイデアで、功労賞が4年とするならば繰り返し4回くらい受賞すると20年になるので金メダル相当というのものもあるかと思う。

笠原主査（事務局）

今回のネットワーク会議では、ECO大賞のある程度の改正案ができていると思う。活動されている団体の方にご意見をいただきたい。現在、受賞した団体には賞状と盾を授与していますが盾をどうするか検討しています。活動するうえで、盾を見せる機会がないのではと思う。資料には賞状のみと書いているが、活動されている団体に、代わる物として、新しい名称「横須賀いいね★エコ活動賞受賞団体」が記載された「のぼり旗」を差し上げ、外で活動するときにアピールできるものとして考えている。受ける側としてどうか。

高橋座長

団体として受賞したときに副賞があると置場に困る。事務局がないのでサポートセンターに飾ったり、自分の部屋に置いている。結局、副賞だとそのようになってしまう。「のぼり旗」は外で活動するときに大変いいと思う。

内船構成員

最近、どの団体もホームページを出しているので、「〇〇賞受賞」というバナーを環境企画課で作っていただき、それを貼ってもらいリンクをクリックすると賞がわかるホームページに飛ぶと、ホームページを見る人には箔がつくかと思う。

野崎構成員

広報活動をするときに使える証明マークなどがあると良いと思う。個人的な好みもあるかと思うが、「のぼり旗」は何とも言えない。以前、他の財団からは小さな横断幕をいただいた。イベントのときなどに受付の机に置いたりした。盾よりは「のぼり旗」の方がいいと思う。

奈良谷構成員

イベントを行ったときに記念写真を撮るので、その時に「のぼり旗」があると使えると思う。学校は盾があるといいかもしれないが賞状だけでもいいと思う。

笠原主査（事務局）

学校はクラス単位も考えられるので、賞状だと貼れると思う。学校は飾る場所があるので賞状より盾の方が良いとは思いますが、盾と比べたご意見を伺った。ホームページのバナーの件はこれから調べる。

高橋座長

では、最後に事務局から連絡事項をお願いします。

笠原主査（事務局）

自然環境共生課からお知らせがあります。

吉田松子構成員

自然環境共生課では自然環境をテーマとした講演会を毎年開催している。昨年は「外来植物」、一昨年は「身近な自然との共生」とのテーマで行った。今年は12月3日（土）に「身近な自然再発見、外から見る横須賀の魅力」をテーマに日本生態系協会から専門の方を講師にお迎えし開催する予定。内容が決まったら皆さまにもお知らせするので、よろしくお願いたします。

笠原主査（事務局）

事務局から連絡事項が4点あります。

1点目は報告2にもありました活動者向けの人材育成講座の参加についてです。皆さまには9月8日付けで紹介させていただきましたが、ご都合がよろしければご参加ください。

2点目はE C O通信第22号を机上に置かせていただきました。9月20日までに変更点がございましたら事務局までお願いします。

3点目は次回の環境教育・環境学習ネットワーク会議は来年の2月を予定しております。皆さまのご予定に関しては12月中旬に日程調査票をお送りしますので、ご回答をよろしくお願いたします。

4点目は来年の1月28日に「横須賀かんきょうフォーラム」をヨコスカ・ベイサイドポケットで開催します。フロア展示、ステージ発表団体を広報よこすか11月号にも掲載し募集しますが、ご提案がありましたらお願いたします。当日の出席もお待ちしています。事務局からは以上です。

高橋座長

ではこれで第21回環境教育・環境学習ネットワーク会議を終了します。ありがとうございました。